

## 関東地区研究会の状況報告

田野崎 昭 夫

三月一九日東京教育大で関東地区の村研究会があつた。年度末で多忙のこととて出席者はそれほど多くなく、小池・福武・中野・常盤・田野崎・池見・園田・柿崎、それに報告者の島崎であつた。島崎氏の「農村都市化」をめぐる諸問題は、冒頭に行われた拡大委員会をきりかえてすぐ行われたが、その趣旨は別記のようのものであつたが、報告後これをめくつて若干の討論と意見提出があり、関連してこんどの大会の課題について論じあつた。

報告者は農村と都市、いゝかえれば農業と工業の不均等発展の原因を、土地所有の制約と、生産財部門が消費財部門より大きいことに求めて、これを農村都市化の理論的前提とし、共同体の解体、市場関係の拡大、より明確には小生産者としての農民層の分解において農村都市化を把握し、さらにその具体的現象として農業経済学、農村社会学からみた農村問題、地方行政の変貌との関連、都市類型の相異を「地帯構造論」との関連において追求していつた。

この報告に関して、まず小池氏から農村・都市の不均等発展の二因に対して、土地所有の制約という方の一因のみではないかという疑義が示されたが、他方常盤氏からはむしろ生産財部門が消費財部門より大であるというよりは直接の規定とはならぬとしても、一応因とすることはできないかという意見が出された。そしてそのさい、農業は第二部門（消費財産業）かどうかということ

については一般にはそれだけに限定されないが、わが国の場合は大抵そうだといえるというのが報告者の考えであつた。

また福武氏が、報告のなかでいわれた「都市的諸関係」とはどのようなことを意味しているかをたずねたのに対して、報告者は、これはマルクスのいつていることからの引用であつて、内容的には農村が労働市場へ参与することなどを指している旨答えたが、さらに福武氏は、都市的關係というよりよな表現はむしろつとひろい社会的な意味で使用した方がよいのではないかという意見であつた。

有賀氏は「共同体と市場関係の関連」の移行発展段階の図式に興味を示しながらも、こゝで共同体をどう考えているか、とくに都市共同体をどう考えており、それは図式ではどう展開されるのかということをたずねたが、報告書によれば、共同体は大家久雄氏などのいう世界史の意味でとらえられ、したがつて都市共同体もギルドや同業組合が中核として考えられるため、それ自体からは原理的に近代都市が発展するものではないということであつた。報告者が都市を市場関係の凝集点とみたことに対して、前近代社会の城下町などむしろ政治的要因によつて形成された都市が多いが、この面をいかにしているのではないかという中野氏の質問については、たしかに都市形成にはその側面も重要であるが、農村都市化という問題提起の場合、そのことは直接重要な要因として扱ひが必要がないから省いたとの報告者の答えであつた。

そのほか、討論において報告者が鈴木栄太郎氏の社会的交流の結節点という都市把握を高く評価したのに対して、園田氏が鈴木説を批判し、また都市・町・村落などの区分標識としてかえつて小池氏が住民意識を注目したのには有賀氏からはたしかにその重要性は社会学でみとめてゐるが、そこへ到達するまでの規定要件が複雑でそこ

が問題であることが強調された。そしてさらに「地域」と「地帯」との相異（有賀氏そのほか）、「地帯構造論」と市場圏との関係（園田氏）などが論じられたが、結局「都市化」の概念が問題とされ、小池氏は農業・工業の不均等発展の解消が都市化そのものではないから理論的前提としなくてよいであろう。それは共同体とつながる必然性がないという意見であつた。とにかく、都市化の概念はきつめてあつたに便われており、都市近郊村の都市圏編入が最も具体的であるが、市場関係を中核とする都市的關係の農村への侵入、農民が都市へ移住する農民の都市化、農村に都市關係の变化などいろいろのとらえ方があることが明らかにされた。

報告は「農村都市化」の一方で理論的前提が、他方で都市化の具現的現象がくわしくのべられたのにくらべて、都市化そのものの理論は充分に論じられなかつたようである。筆者の理解したところでは、それは農民層の分解が中心であるように思われたが、それが報告者の最も研究している領域であるだけにもつと展開してほしかつたし、またこのような農村都市化のとらえ方もつと検討されてよかつたように思われる。

討議はそのまゝ再び拡大委員会の形に移行していき、今年度大会の課題として都市化の概念はあまり明確でないので再検討してはどうかという意見が出され、昨年これが適正規模農家の問題から提起され、農民組織の問題や農協の問題との関連から発展した課題であることが説明され、そして都市化という表現が村研に似つかわしくないという意見、もつとひろく農村に都市構造を扱つてはどうかという意見、規定のあいまいな都市化をこそむしる問題とする価値があらうという意見などが出され、結局、このような趣旨のテーマをはずれることはないとしても、なお今後ひろく会員諸氏の意見をま

つて、はつきりきめようということになつた。

そのほか今年度大会を、はじめ九州でやることが検討されたが無理だろうということで、十月十五・六日頃関西で開催の線に一応まとまり、年報刊行継続に関する件も若干言及されたが、なお検討しようということであつた。（一九六三・四・一〇）